



テーマ展 解説シート①

壺Gってどんな壺？

須恵器壺Gは、奈良文化財研究所の器種分類によると「細長い体部に、太くて長い頸部^{けいぶ}を付す形態で、轆轤水挽^{ろくろみずびき}成形で作られる」と説明されます（神野・森川 2010）。ここでは、なかなか馴染みの薄い須恵器壺Gの考古学的な特徴について整理してみたいと思います。

【1】 奈良時代後半から平安時代前期の遺跡・遺構から出土する

壺Gは、平城京・長岡京・平安京の三つの都から出土しています。壺Gと共伴する土器の年代から概ね8世紀後半～9世紀中ごろまで全国各地に流通していたことがわかっています。

【2】 画一的な製作工程により細長い独特な形態を作り出す

生産地資料の観察の結果、下記の製作工程が復元されます（図1）。

① 轆轤台に粘土円盤を設置する②体部水挽き③肩部まで引き上げ④糸切りによる切り離しと乾燥⑤口頸部粘土貼り付け⑥口頸部引き上げ。

【3】 装飾を施さず、全体的に粗雑な作り

他の長頸壺に多い頸部や体部への沈線といった装飾は原則施さない。また、底部の削り残しや糸切りによるはみ出した粘土が残ったものが多く、全体的に丁寧に作るという意識は低い。

【4】 容量は150～600ml 前後

平城京から出土した壺Gの容量分析（森川 2025）

によると、①150～200ml、②300ml 前後、③400～600ml にピークがある。一方、長岡京や平安京から出土した壺Gは200mlのものが多く、徐々に小型化していくことがわかります。

【5】 駿河国と伊豆国の須恵器窯で生産された

静岡県藤枝市の助宗窯跡群、伊豆の国市花坂島橋窯跡の二つの須恵器窯で生産されたと考えられています。他に、埼玉県の鳩山窯跡群や千葉県南河原坂窯跡群でも生産された可能性が指摘されておりますが、壺Gを生産した確実な証拠は確認できていません。

【6】 生産地から離れた都や東日本を中心とする全国各地から出土する。

展示解説パネルをご覧のとおり、さまざまな地域から出土しています。傾向としては、国府や官衙関連施設、城柵といった公的機関や幹線道路（北陸道や東山道など）に沿って分布します。

【参考文献】

小田裕樹 2025「須恵器壺G（長頸瓶）とカツオ貢納」
『東国におけるカツオ貢納関連遺物とその周辺』静岡県考古学会 2024 年度シンポジウム実行委員会
神野恵・森川実 2010「1. 土器類」『図説平城京事典』終風舎
森川実 2025「瓶に入った堅魚煎汁と平野祭の五合瓶」
『東国におけるカツオ貢納関連遺物とその周辺』静岡県考古学会 2024 年度シンポジウム実行委員会

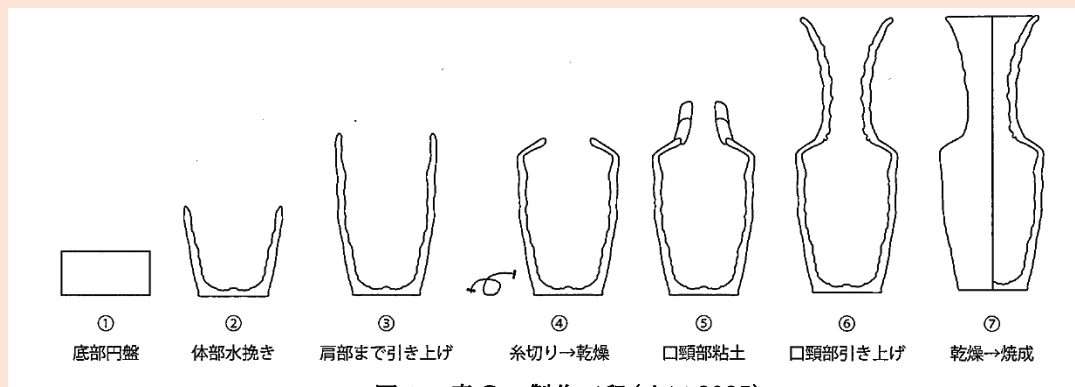


図1 壺Gの製作工程(小田 2025)